
戦乙女の鎮魂歌

駿河良文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦乙女の鎮魂歌

【Nコード】

N1674G

【作者名】

駿河良文

【あらすじ】

戦場を見守り、死した戦士の魂を集める戦乙女。過去、現在、そして未来と、変わりなき人間の営みの中で、彼女が見た戦士達の記録。一話完結型短編集。

狙撃兵

“太古の昔、ゆるぎない現在、遙かなる未来”

“慈愛の大地、崇高なる大空、母なる海原、そして無限の宇宙”

“いつの時代であろうとも、いずこの世界であろうとも”

“血が流れぬときはなく、魂が燃えない場所はない”

“人は争い、殺し合う”

“これは私が見守ってきた、そんな戦士たちの記録”

“そこには、ロマンも感動もない。ただ、生と死の冷淡な現実があるだけ……”

狙撃兵

（未来）

惑星B - 57。

国際軍事連絡機構に、反連合理主義のアジトがあるとの情報もたらされた。

ただ、磁気嵐のため、戦闘ロボットの自律侵攻が難しいと判断された。

そのため、第6管区国連宇宙艦隊旗艦「AOSORA」所属の戦闘実行隊が偵察部隊として派遣された。

空母「AOSORA」から、特殊作戦シャトルが発進し、ステルスモードで流星を装いながらB-57に接近する。

そのシャトルから支援衛星が数機切り離された後。

オルタ特務曹長を隊長とした8人の惑星戦闘実行隊、および19式惑星探査高機動バギー2両がシャトルから飛び出した。

装甲宇宙服をまとった彼らは、B-57の大気圏へと突入する。

赤い光点となりながら落下し、高度1万メートルで翼型落下傘を展開する。

互いに連携をとりながら、B-57の地表面へと降下した。

彼らは素早く19式を回収し、移動を開始する。

6時間後、19式高機動バギーの助手席に座る装甲宇宙服の男は、ヘルメットの内部で、視線を動かす。

彼の脳内部の電気信号の活性部位をヘルメット内部の電極が感知し、さらにバイザーの瞳孔センサーが彼の視線を追う。

そうして彼は、バイザーに投影されるタスクバーから通信を選択する。

「おい、新入り。われわれの行動限界は？」

後部座席の“新入り”は答える。

「はい！ 汗、尿の循環処理能力、および静脈栄養の補給と、それに対する人体の許容から2週間です」

隣を走る19式から通信が入る。

「いや、それは違うな。3日だ」

“助手席の男”が言う。

「ほう、B1、そりゃなんでだ？」

そこに通信が入る。

「俺の性欲がそれ以上もたん」

通信機から一斉に笑いが漏れる。

“運転席の男”が言った。

「新入り、ちゃんと、くそはしたんだろうな」

“新入り”は答える。

「はい。ホモ野郎の軍医に、ケツの穴から口の穴まで、何も固形物は入っていないことを証明されました！」

一同は笑う。

その瞬間だった。

隊員のヘルメット内部にアラームが鳴り、隊員B2の脳波と心電図がフラットになったことを知らせる。

“助手席の男”が隣を走っているはずの19式2号車をみると、2号車は、ひっくり返っていた。

次いでB3隊員の心電図がフラットになったことを知らせるアラームとなる。

“運転席の男”はすぐに事態を悟った。

B2隊員は優秀なドライバーであった。そして彼の死亡と車両事故が意味するところは。

“助手席の男”が、

「コードレッド!!! 進路をランダムパターン!!!」
と叫ぶまでもなく、“運転席の男”はハンドルを切る。

高機動バギーがジクザクに走る。

その運転席の前を、緑の光が一瞬横切った。

と19式のセンサーが感知し、隊員たちに警告音を鳴らす。

「おせえんだよ!!!」

“助手席の男”は怒鳴りつつ、

「A3、支援衛星に狙撃装置を解析させろ!!! A2、ランダムパターンを維持したまま、2号車に接近しろ!!!」
とわめいた。

狙撃兵アサドには主義主張もない。

ただ任務に忠実なだけであった。

地面埋没型のカプセルで3日に1回の補給と体のメンテナンスを行いつつ、1か月を過ごしていた。

そして本日、あたりに張り巡らせたセンサーの一つに不審な振動を感知した。

レーダー反応、熱反応、生物電気生理反応も感知できなかった。すなわち、それが熱、電磁波遮断システムを完備した部隊、すなわち国際軍事連絡機構の部隊であることを、アサドは疑わなかった。

すぐさまアナログの超望遠光学スコープを覗き、3キロ先に2台の車両を発見した。

連中も高度なセンサー郡を持っているに違いなかった。

だから、高度な自律狙撃兵器は使えなかった。

彼は再び手元の大出力レーザー狙撃銃を構える。

しかし、2番目の標的の車両は、すでに狙撃に気づき、ジグザグに走行を行っている。

そこで彼は2番目の車両をあきらめ、最初に運転手を撃たれ、今はひっくり返っている車両に銃を向ける。

車両の影に、二人の人影を認める。

「新入り……じゃなかったA4！ 状況は！！！」

“助手席の男”がヘルメットの中で声をあげる。

“新入り”が、右に左に揺れる車両の中で転げながら叫ぶ。

「砲撃衛星の到達は25分後！！！」

「くそつたれ！！！！ A3、煙幕弾は！！！」

“助手席の男”は、適当な方向に、手元のビームライフルをぶっ

放しながら叫ぶ。

もう一人の後部座席の男、車両搭載のレールキャノンをぶっ放している“ A3 ”が言い返す。

「ねえよ！！ あのかそ主計課のハゲ三佐が、コスト削減とやらで搭載を許さなかったっていったろ！！」

「あん！？」

“ 助手席の男 ” の声に “ A3 ” が付けくわえる。

「この磁気嵐だ。実弾、エネルギー照射を含めて、遠距離狙撃攻撃はないとかめかしやがったんだろ」

「くそつ。そうだったつ！ あのアホ！！」

“ 助手席の男 ” は悪態をつく。

運転手の男が急ハンドルを切り、

「そのアホに丸めこまれたのはどこのどいつだ」

“ 助手席の男 ” が転げそうになりながら言い返す。

「ああ、俺だよ！！」

アサドは、ジグザグ走行をしながら、とりあえずこちらの方向にビームライフルとレールキャノンを撃ってくる車両は無視し、ひっくり返った車両の影の人影、その唯一露出している腕に照準を絞る。

“ 助手席の男 ” のヘルメットに “ B1 ” の文字の点滅とともに通信が入る。

「…………… A1 …… 報告……………、右腕をぶっ飛ばされた！！ くそ野郎は、2時の方向だ……………！！」

“ 助手席の男 ” がわめく

「くそっ！！　おい、B4！！」

「こちらB4！！　B1のスーツの閉鎖とブレークライト止血は正常。とりあえず生命機能に問題はない！！」

通信が入り、“助手席の男”が叫ぶ。

「B1、後で再生させる。　頭だけは吹っ飛ばされんなよ！！」

その時、1号車両は、ひっくり返る2号車両の前を通過した。

アサドは舌うちをする。彼は狙いをつけていた2号車両から、その前を目ざわりにジグザグ走行する車両へと標的を変える。

“助手席の男”の、

「A2、狙撃手の狙いはこっちにつけさせる」

との通信に、“運転席の男”が通信を返す。

「わーってるよっ！！！！」

アサドは狙いをジグザグ走行を続ける車両の予想進行方向に向かって、大出力レーザーライフルのトリガーを引く。

ちょうどその時、“運転席の男”がハンドルを切り、1号車両のフロントガラスに穴があく。

「みんな、生きとるなっ！！」

“助手席の男”は、全員の生命反応を確認する。そして、

「A3！　狙撃者の位置は！　衛星はまだかつ！」

と“A3”に叫ぶ。

“A3”が、

「観測衛星でも解析は無理だ！ 何のために俺たちがGPS抱えて降下してるんだよっ！ この磁気嵐のためだろう！！」
と言り返す。

“助手席の男”は、ちつと舌打ちをする。そして、意を決したように言った。

「B1、B4、確か、6式迫撃砲があつただろ！！」
と通信を入れる。

「ああ……、おい、まさか！！」
との通信が返る。

“助手席の男”が、再びハンドルを切った車両の中で転げながら言う。

「そつだよ。60ミリNBだっ！！ 俺達が囷くわになっている間に、2時の方角のどつかに、適当にぶっぱなせ！！ 自爆にならないぎりぎりのところでな」

その車両の前に光が突き刺さり、土煙りがあがる。

“運転席の男”が、

「おい！！ いいのか？ 管理委員会も通さずに……、特に第六管区ちくじゃ……」

再びハンドルを切り、車両を横滑りさせる。その脇を光が通り過ぎる。

「いいんだよ！！ 見晴らしを良くするための“土木工事”だ。」
助手席の男がビームライフルを適当にぶっ放しながらいう。

“新入り”が叫ぶ。

「しかし、いいんですか？ 惑星改造の土木工事なら確かに許可されますが、それも委員会を通さないと……」

“助手席の男”が言い返す。

「責任は俺がとる！！ そして後であのクソ三佐になすりつけてや

るっ!!」

アサドは、階級もない、反連合理主義の戦士だった。気がついた時には銃をもって、気がついた時には戦っていた。なんのために戦うのかは知らない。考えたこともない。

強いて言うならば、自分の生きている場所で生きていくためだった。

そして、今、確かに彼は生きていた。

彼は今まで叩きこまれた技術、研ぎ澄ました間隔を、一心にスコップのレティクルと指先に集中させていた。

そして、これまでの人生の集大成を放とうとした時、スコップの片隅に何かを捉えた。

2号車両の影から発射されたそれは、アサドから2キロ離れたところへと放物線軌道を描き、そして、そこで太陽となった。

灼熱の光と爆風が放たれる。

アサドは、狙撃手であり、その狙撃手がさらされる脅威は一通り知っていた。

狙撃兵器に対する有効兵器は狙撃ではなく、面で制圧する兵器である。

すなわち榴弾^{グレネード}、対戦車兵器^{バスターカ}、携帯誘導兵器^{ミサイル}、支援爆撃、支援砲撃、そして、この時代であれば工作用小型核爆弾であった。

アサドは本能的に死を悟った。

反連合理主義の抵抗組織 B - 57 支部にとって、アサド、及びその他に配置した狙撃兵は困だった。

アサドは知る由もなかったが、この核爆発を察知した B - 57 支部は、国際軍事連絡機構が迫っていることを確信し、脱出を開始することとなる。

だが、アサドはそれを知ったところで、なんの理不尽さも感じなかったであろう。

電磁波が、軍用プロテクトを持たない粗末なつくりの反連合理主義の使用するセンサーをダウンさせ、また、アサドの生命維持カプセルのシステムをダウンさせる。

同時にアサドは、自身が核兵器に匹敵する兵器であったことに、充実感を覚えながら、光と熱に包まれた。

そしてアサドは、自身に降り注ぐ光の中に、神々しい女の姿を見た。

青い鎧に、翼の髪飾りをした女だった。

アサドは、その女の包容を受け止めながら、その体を燃やした。

“私は、その魂にいいました”

“神々が黄昏を迎えるまで、あなたに栄光の戦場をあたえましょう”

狙撃兵（後書き）

狙撃兵あとがき

未来の戦争像を淡々と描写しました。

今回に物語性はありませんので悪しからず。

核技術も惑星開拓の時代になれば、土木工事用の技術として一般化されるかもしれません。

そんなとき、被爆国日本はどのように向き合えばよいのでしょうか？

平安の都

“ 太古の昔、ゆるぎない現在、遙かなる未来 ”

“ 慈愛の大地、崇高なる大空、母なる海原、そして無限の宇宙 ”

“ いつの時代であろうとも、いずこの世界であろうとも ”

“ 血が流れぬときはなく、魂が燃えない場所はない ”

“ 人は争い、殺し合う ”

“ これは私が見守ってきた、そんな戦士たちの記録 ”

“ そこには、ロマンも感動もない。ただ、生と死の冷淡な現実があるだけ…… ”

平安の都

…灼熱の大地。

日差しが照りつけ、赤茶けた大地を焦がす。そこから沸き立つ熱気が、空気をカラカラに乾かし、そして光をゆがめる。

その歪んだ光景の中に、銀色に光る兜と茶色の鎧、槍をもった兵士たちが揺らいでいた。

そのローマ兵たちは、土煙りの中、目の前にある高台を見上げた。反乱者どもが立てこもる要塞マサダ。

明日は総攻撃。

ローマ兵の将軍は、テントの中、葡萄酒を飲みながらマサダ要塞を見上げた。

反乱者が、この灼熱の要塞に立てこもって、もうどれくらいになるだろうか。だが、明後日にもなれば、ここもまた、砂漠の一光景に同化するほど、静かになるであろう。

要塞内部。

彼は、錆ついたナイフをもっていた。

目の前には、子供を抱え、祈りを捧げる女がいた。

男は、涙をながしながら、そのナイフを振り下ろした。

男は呆然となりながらも、その血みどろのナイフを見る。粗末で原始的なナイフは震えていた。

男は顔をあげる。

目の前に力なく倒れている人の体。その血の海にあるのは、彼の妻と子であった。

マサダ要塞に立てこもった彼らは、必死に抵抗を続けた。

数の上で、圧倒的に不利な彼らは、ローマ軍に対して粘り強く抵抗を続けた。

だが、それも風前のもしびだった。

ローマ軍は丘の上の要塞攻略にあたり、彼らのお家芸である道路工事を行った。

すなわち、その丘の上への要塞に迫る傾斜路を、同族の奴隷に作らせたのだ。

その突撃路が完成し、もはやローマ軍の突撃を阻むものはない。決断の時だった。

降伏し、一族ともに奴隷として生きるか。あるいは罪人として処刑されるか。

栄光ある神の国へと旅立つか。

彼らは後者を選んだ。

だが、問題があった。

神は、彼らに自殺を禁じていたのだ……。

「白髪の、深い皺の刻まれた目の細い男は、
……」

そこでハツとして目が覚めた。

彼は、ベッドから身を起こし黒いセルフレームの眼鏡を掛けてベッドから起きた。

すでに朝だった。

年老いた体を起こし、トイレへと行く。

時間をかけて排尿する。

ホテルのトイレはなかなか落ち着かない。ましてや異国のホテル

ともなればなおさらだ。

そのため、さらに排尿に時間がかかった。

そして、ため息をついてトイレから出て、閉じられたカーテンを見る。薄い光がカーテンの向こうから差している。

彼はカーテンに近寄り、それをガバツと開けた。

すみ渡った青空。

茶色から白のその異国の町には、朝だというのに、火傷するほどの熱気が感じられた。

窓を開ける。

乾いた空気が、何かの祈りのような声とともに部屋に入ってきて、佐藤公一の頬をかすめた。

砂漠の道を守る一台のバスが止まる。途中の土産物屋で、トイレ休憩である。

「いやあ。こつ年を取ると、トイレが近くていけませんなあ」

佐藤は白い帽子を押さえ、息子夫婦から今回の旅行の記念にともらったデジカメを首から下げて言った。

「ほんとに。しかし、イスラエルですか……、まさかこの年で、こんなところまでくるとは思いもしませんでしたね」

佐藤の隣で、緑のベレー帽をかぶる老人が言った。

佐藤は答える。

「まったくです。ですが、来られた我々は幸運ですよ。花丘さんは前立腺癌で逝ってしまいましたし、墨田さんは痴呆がひどいようです」

彼らは、バスの乗り口に向かう。

「そうなる以前に、我々は死んでいたかもしれないのですから……」
「人生は、ほんとにわからんもんですな……」

そう言いあう彼らがバスに乗り込む脇では、若い日本人女性の添乗員が旗をもつて老人たちに「おかえりなさい」という。
添乗員のもつ旗には、「S県S市軍人会、御一行様」とあった。

バスは、灼熱の大地を発車する。

土埃の舞う道走るクーラーの効いたバスの中で、佐藤は、緑のベレー帽に言う。

「しかし、吉川さんは特攻隊でしょう。ほんとに運がいい」
緑のベレー帽の吉川は言う。

「当時は名誉だと思っていましたかね。出発直前のまわるプロペラが、今でも思い出されます」

「そのプロペラが止まっていなかったら、こうして一等兵の私が少尉殿とお話することもなかったわけですから」佐藤がしみじみとビール缶をあけながら言い、

「操縦席で待機して、仲間が次々に発進していく中、目の前のあのプロペラが止まった時のこと……、今でも鮮明に覚えていますよ……、私は泣きました。なんで泣いたのか……、今では覚えていませんがね」

吉川が目を細める。

吉川は、差し出されたビール缶を「結構」と断りながら、枯れ果てた大地の地平線の先を見る。

「戦友が次々に、お国のために死んでゆくなか……、“寮”送りになる前に、再度の出撃を望み……、しかし終戦になった」

バスは速度をあげる。道端の細々とした土産物やには目もくれず

走りぬける。

吉川は、

「しょうがないから私は必死に生きましたよ。ですが、私には家族がおりませんので、私が死んだら、遺産は、ゼーんぶお国がお召し上げですよ。あげくお国から後期高齢者の称号までもらいました」
笑いながら言った。

佐藤はビールを傾けながら訊く。

「“知覧”には行かれたのですか？」

「いや……、むしろ行く勇気がない……」

吉川は首をふり、そして言う。

「その点、佐藤さんはすごいですよ。硫黄島の式典に参加されたのでしょうか？ 死地に再び赴くとは」

佐藤は笑う。

「ええ。なかなか楽しかったですよ。あと、元アメリカ兵とも話しましたよ。つたない英語で」

バスが、道路の舗装の悪い所を乗り越えたのが、一瞬揺れる。

佐藤は、揺れた瞬間にビールをこぼしそうになって、慌てて缶からあぶれたビールをすすり、そしてにこりとして言った。

「それでアメリカ兵、あいつら、元気なんですよ。とても我々と同じ老人とは思えないぐらい、でかい図体で。あまりにも悔しかったから、“ふあつくゆう”言ってやるうかとも思いましたが、国際問題になるといけないから、握手してきました」

吉川が首をふるう。

「元気ですねえ、佐藤さんは」

佐藤は、揺れた瞬間にビールをこぼしそうになって、慌てて缶からあぶれたビールをすすり、そしてにこりとして言った。

「いえ、鈴木さんの……昨年、脳溢血で逝かれた鈴木さんの受け売りですよ。鈴木さん、毎年真珠湾にも行かれていましたからね」

バスは、とある観光地で止まる。

吉川は、立ち上がりながら、にこりとした。

「いい時代ですね。鬼畜米英、イエローモンキーと言いついていた兵士たちが、いまは仲よくおしゃべりできる」

「いい時代です。だが、いつまで続くか……。昨今の日本の若者たちの起こす事件を見ると、はやくあの世に行きたい気がしますよ」

佐藤がビールをホルダーに納めながら立ち上がる。

吉川が言う。

「そう言う人に限って、長生きするもんですよ……」

その時、佐藤はバスの窓の外をじっと見つめていた。

「……」

その呆けた様子に、吉川が、

「佐藤さん？」

と言い、佐藤は、

「……あ、ああ、ええ。」

と答えた。

白い帽子をかぶった老人がバスを降り、そして目の前の丘を見上げた。

ごくりと唾を飲む老人。そして落ち付かない様子でキョロキョロと周囲を見ている。

緑のベレー帽の老人が、その様子に気づき、

「佐藤さん、大丈夫ですか？」

という。

白い帽子の老人は、

「……、え、ええ」
と汗をかきながら答えた。

死海を臨む丘。

S県軍人会の慰安旅行の一行はロープウエーで400メートルの
高さの丘の上へと行く。

添乗員の若い日本人女性がアウンスをしながら歩く。

死海文書の発見された洞窟……

へロデ王時代の宮殿の……

吉川が、

「やれやれ……、あとは死海観光ですな」
と佐藤に言った時、佐藤は、展示されているパネルの前に呆然と立
っていた。

「佐藤さん……？」

吉川が声をかけ、佐藤が、

「……。いえ、なんでも」

そう言つて振り返つた。佐藤の体は震え、そして一筋の涙が落ちた。

おちた涙は、すぐに乾いて、跡形もなくなった。

そのパネルには、十個の陶片が展示されていた。

籠城した1000人のユダヤ人たちは、話し合った。攻めてくるのはローマ軍本隊ではなく、ユダヤ人奴隷部隊である、と。

このままいけば、同族同士で殺し合うことになる。

食糧庫は満杯だった。数日は持つかもしれない。

しかし勝負は見えているうえ、同族と殺しあい、あげく捕虜となるならば……。

奴隷や捕虜にはならない。

主なる神以外には主人をもたない。

彼らは決断した。

だが、自殺も禁じられていた。

そこで家長が、家族を殺した。

家族に自殺の罪を着せないために。

そして家長も殺し合った。

そして10人が残った。

彼らは900人以上もの死体を確認した。

水汲みに出た女と子供数人がいなかったが、ここで起きたことの語り部とするため残すこととした。

10人は各々の名前を陶片に書いて、くじとした。

9人は、くじで当たった者に殺され、そしてくじであたった一人が、自殺の罪をかぶることとなるだろう。

そして、くじであたったのは“彼”だった。

彼は、9人を殺した。

960人分の血の重みが彼にのしかかる。

愛ある殺人は許される。

だが自殺は許されない。

彼は、ただ一人、地獄に落ちることになるだろう。

そして彼は、地獄に落ちるべく、手榴弾の雷管を叩いた

「……さん、佐藤さん……！」

そこで再びハツとして佐藤は目を覚ました。そこに吉川の顔を見る。吉川が言う。

「本当に大丈夫ですか？ うなされていましたよ……、気分が悪いのですか？」

佐藤は目をこする。バスの中だった。バスは再び道を走りゆく。

「ああ、いえ、大丈夫ですよ……。ビールを飲み過ぎてしまったようです。」

佐藤は答えた。

とある街のカフェ。

そのカフェのテーブルに、佐藤と吉川はいた。

自由時間であった。

軍人会のメンバーは思い思いに観光を楽しんでいる。

佐藤の妻はすでに他界しており、吉川も家族がいないため、二人はともに行動していた。

佐藤は、つたない言葉でなんとか注文したコーヒーをすすりなが

ら言った。

「吉川さん、わたしは硫黄島で捕虜になったのですがね……。わたしも吉川さんと同じく死んでいるはずなんですよ」

吉川も、コーヒーをすすりながらいう。

「珍しいですね……。佐藤さんが、戦場のことを語るのは……」

佐藤は、笑顔で首をふる。

「当時……。私の班は上官が死亡しておりましてね。ただ、最期の命令として自決命令が出ていたんですよ……」

……。暗闇の洞窟の中で、僅かな火の光の中、佐藤一等兵は自分たちの班を見回した。

上官は、最後に“玉砕”を命令して死んだ。

アメリカ軍の艦砲射撃だがなんだが、洞窟の周囲に降り注ぎ、とても外部と連絡できる状態ではない。

さらに洞窟の外で爆発がおき、洞窟に地響きが響く。

暗闇と土煙りのなか、佐藤は決断した。

この状態ではもたない。助けもこない。食糧もない。生きて捕虜の辱めは受けない……。

10人いる班員は、自分より若い一等兵、二等兵ばかりだった。

班の指揮権は自分にあった。

「自決する」

佐藤一等兵は言った。その時、佐藤には迷いがなかった。

自決する武器に迷いがあった。

銃剣では死ぬまでに時間がかかる。若い兵たちには酷であろう。

小銃殿もあつたが、どうせなら華々しく、一瞬で皆、同時に死にたいものだ。

なら、爆弾がいだらう。

他の兵たちは、暗闇の中、凍りついた表情で、汗を流していた。死への恐怖か、非国民と言われることへの恐怖か…。

彼らは、佐藤が出した、唯一残る手榴弾を、無表情に見つめていた。

班員は輪になって肩を組んだ。

「死んで、靖国で会おう」

そして佐藤一等兵が腕を伸ばし、

「大日本帝国、万歳！！」

叫び、手榴弾の雷管を地面に叩きつけ、爆発を待つ間に腕を戻して隣の戦友の肩に戻した。

閃光と爆発が起き、佐藤一等兵は吹っ飛んだ。

だが……、なぜか彼は死ななかった。破片が足にあたり血が出ているが、致命傷ではなかった。

「……！」

そして、わずかに残る焚き火の火の中で、彼は地獄を見た。

他の若い兵たちは、細切れになっていたが、それでも5人は生きていた。

一人は、しきりに「万歳、万歳！」と叫んでいた。

一人は、しきりに「死にたくねえよ、死にたくねえよ！」と叫んでいた。

残る3人は、ただ言葉にならない呻きで叫んでいた。

「……っ」

阿鼻叫喚の洞窟の中で、佐藤一等兵は地面を這いずり、大切に横

たえてある陛下からの預かりものである小銃殿を取った。

仲間をひとりひとり、自らの手で殺したくなかった。

だからこそ手榴弾自決を図ったのだが……、しかし、彼らを一刻も早く靖国に送るのが自分が軽傷ですんだ理由だと思った。

佐藤一等兵は小銃殿をとると、言うことを聞かない足からくる痛みを無視しながら、歯を食いしばり、寝そべったまま、上半身をおこした。

彼は、戦友に向けて引き金を引いた。

「大日本帝国万歳！！」

銃声が洞窟に木霊し、万歳、万歳、と叫ぶ兵は、頭を吹っ飛ばされて、動かなくなった。

「天皇陛下、万歳！！」

銃声が洞窟に木霊し、死にたくない、と叫ぶ兵は、首を打ち抜かれて、動かなくなった。

「万歳！！ 万歳！！」

佐藤一等兵は、這いずりながら次々に引き金を引いた。

そして、最後の一人となった。

銃口を残る一人に向けた時、その兵、原田二等兵は、佐藤一等兵をにらんだ。

彼は言葉なく、ただ、呻き、叫びながら、自身の腸を引きずりながら、佐藤一等兵へと這ってくる。

「……靖国で会おう！！」

佐藤一等兵は、小銃殿の引き金を引いた。

弾は原田二等兵の肩を打ち抜いた。

だが、原田二等兵は呻きながら、顔をゆがませながら、佐藤一等兵の足を掴んだ。

原田二等兵は口から血をだらだらと垂らしながら、佐藤一等兵の

上に這い上がるようにする。

佐藤一等兵も、目を大きく見開きながら、小銃殿を投げ出した。そして、原田二等兵の首を絞めた。

目を見開く原田二等兵。

その眼をみながら、佐藤一等兵は、目を細めた。

そして焚き火に「バンザイ！！！！」との絶叫がこだました。

しばらくして、佐藤一等兵は、体を引きずって、放りだした小銃殿を取った。

「小銃殿！！ 陛下からの預かりものであらせられる小銃殿を粗末に扱い、大変申し訳ございませんでしたっ！！」

佐藤一等兵は、小銃に敬礼する。

そして撃鉄を起こして、銃口を口に咥え、

「ハンハーヒッ！！」

目をつぶって叫びながら引き金を引いた。

だが、弾は出なかった。

「……………」

佐藤一等兵は、小銃殿の装弾数が5発であることを思い出す。

佐藤一等兵は、鬼の形相で、小銃殿を地面に丁寧に置き、そして、別の小銃殿を睨む。

「生き残って……………」

佐藤一等兵は、焚き火の炎が消え行く暗闇の中、叫んだ。

「生き残って……………」

その時、聞きなれない言葉の叫びと、灼熱の空気と光と、急速に

失われる空気に、佐藤一等兵は、
「生き残ってたまるかあああああ！！！！」
叫びながら気を失った……。

白い帽子をかぶった老人は、コーヒーカップを見つめながら言った。

「米軍の火炎放射で酸欠になりましたねえ……。気づいたときは、捕虜でしたよ……」

緑のベレー帽の老人が言った。

「運が良かったですねえ。殺されずに……。殺されたり放置されたりした捕虜も多かったと聞きますから……」

佐藤は、ため息をついた。

「いや、まったくです……」

しばらくの沈黙ののち、佐藤はつぶやくように言う。

「実を言うと……、私は靖国神社にだけは行ったことがないのでよ……。とても行けない……。一人生き残って、どう英霊たちに顔を向けたものか……」

吉川が励ますように言った。

「まあ、こうして生き残って、祖国を豊かにするために働いたのですから……。あちらで彼らも暖かく見守ってくれているでしょう」

「豊か、ねえ……」

佐藤はしみじみと言った。

「……年金、後期高齢者、介護保険、教育崩壊、切れる若者……」
吉川もしみじみと言った。

「……まあ、老人が生きるには……、地獄ですな……」

その時、

「コンニチワ、ニホンカライラシタノデスカ」
隣のテーブルに座っていた若い男が、カタコトの日本語で話しかけてきた。

「「え、ええ」」

吉川と佐藤は、少しびっくりした様子で言う。

その若者は、

「ワタシハ、ヤコブデス。ダイガクデ、ニホンノベンキョウヲシテ
イマシタ」

ニコヤカに言った。

吉川と佐藤は、その人懐っこい若者のヤコブとすぐに打ち解け、
話をした。

「Oh! Dead Sea ニツタノデスカ」

ヤコブが言い、

「ええ」

と佐藤が応え、

「マサダという丘にも行きました」

と吉川が付けくわえる。

ヤコブが言った。

「Oh、マサダ、ワタシモコンド、マサダニイクノデス」

「へえ。観光ですか？」

との吉川の間に、ヤコブは誇らしげに答えた。

「イエエ、ワタシ、ソコクラマモルタメ、グンタイニハイリマス。
イノチハリマス。グンタイニハイルトキ、マサダデチカウノデス」
「ああ、なるほど」

佐藤は、イスラエル軍の入隊宣誓式がマサダ要塞で行われることを添乗員から教わっていた。

「マサダは二度、落ちず……ですね」
彼は、ポソリといった。

「ヒゲキヲクリカエシテハナリマセン。ソノタメニワレワレハ、タカウノデス」

ヤコブの言葉に、吉川が無表情でコーヒークップを揺らす。

「ほお、立派ですね。私も戦時中は、神風特攻隊として……」

「Wow、カミカゼ!? アーユー?」

笑顔のヤコブがびっくりしたように言ったその時だった。

その隣のテーブルで少年が立ちあがった。

あどけなさの残るその少年ムハンマドも、故郷を守りたかった。

それまで平和に暮らしていた家は、イスラエル軍の爆撃で吹っ飛び、父と母が死んだ。

ムハンマドは、兄弟とともに叔父の家に転がり込んだが、生活は経済封鎖で苦しく、叔父の家にも居場所がなかった。

ムハンマドは、これ以上、自分たちのような子供を出してはいけない、と思った。

そして、兄弟の立場を少しでもよくするため、故郷のための殉教者となりたかった。

故郷を守った英雄として、神の国へと旅立ちたかった。

立ちあがったムハンマドは、シャツの下から伸びるコードの先端のスイッチを押した。

ムハンマドは炎に包まれ、隣のテーブルにいたヤコブと吉川も吹っ飛んだ。

佐藤も吹っ飛びながら、自身を包む爆風を笑顔で見つめていた。

そして佐藤一等兵は、自身に降り注ぐ光の中に、神々しい女の姿を見た。

青い鎧に、翼の髪飾りをした女だった。

佐藤一等兵は、その女の包容を受け止めながら、その体を燃やした。

“私は、その魂にいいました”

“神々が黄昏を迎えるまで、あなたに栄光の戦場をあたえましょう”

コネクト

“ 太古の昔、ゆるぎない現在、遙かなる未来 ”

“ 慈愛の大地、崇高なる大空、母なる海原、そして無限の宇宙 ”

“ いつの時代であろうとも、いずこの世界であろうとも ”

“ 血が流れぬときはなく、魂が燃えない場所はない ”

“ 人は争い、殺し合う ”

“ これは私が見守ってきた、そんな戦士たちの記録 ”

“ そこには、ロマンも感動もない。ただ、生と死の冷淡な現実があるだけ…… ”

コネクト

白銀に染まる冬の林の中。

冬季迷彩服に身を包む髭を生やした男は、音もなく前進する。

と、通信が入る。

“びよん総長、右に待ち伏せ”

びよん総長は振り返る。後ろにいるはずの仲間を捜す。二人の間は見つけたが、もう一人の仲間がどこにもいない。

と、

“こちらブリュンヒルデ、敵は排除。突入路はクリア”

と通信がはいる。

その通信ののち、

“さすが、姐さん” “よっ！ 戦乙女”

との通信が入り、びよん総長も、

“さすが、死神と恐れられているだけあるね”

と返した。と、

“びよん総長、後ガラ空き”

との通信が入り、びよん総長は振り返る。

そこにG36突撃銃を抱えた金髪の女がいた。

ぴよん総長は無表情に言った。

“では、行きますか”

彼らは、連携をとりながら、雪煙りをあげないよう急な動きを避けて、ゆっくりと前進した。

“敵は待ち伏せ部隊の連絡が途絶したことから、こちらの攻撃を予期しているはず”

ブリュンヒルデが無表情にいう。

そこに他の仲間から通信がはいる。

“そしたら作戦通り、ここでC4（爆弾）をセット。15分後の爆発で”

ブリュンヒルデが返す。

“ゲロ軍曹と少茶は、左に回って、8時の方向からRPG（対戦車兵器）を打ち込んで。連中が応戦したところで、迂回した私とぴよん総長が、3時の方向から突入をかけるから”

雪の丘のふもとを匍匐前進で這いながら、ぴよん総長は、

“陽動にひっかかったら、連中、驚くだろうね”

と言う。

そこに“ゲロ軍曹”から通信が入る。

“我らが無敵の戦乙女に挑戦しようってんだ。それぐらいのサブライズはねえ”

“少茶”からも通信がはいる。

“死神と噂されているからね、姐さんは”

その通信を聞きながら、金髪女は無表情で、びよん総長の後ろを匍匐前進で這っていた。

数分後、彼らは標的の施設の前にいた。

びよん総長は、双眼鏡を覗きながら施設を見回した。

敵の気配は今のところない。

と、通信が入った。

“きれい……”

びよん総長は振り返った。

風が吹き、雪が舞う。

金髪の女は無表情で雪景色を見ていた。

ぴよん総長が言う。

“こっちは雪だよ、そっちは”

“こっちは雨”

とブリュンヒルデは無表情で返した。

と、6時の方向で爆発が起きた。

標的施設から数人が顔を出すのが、サーモセンサーが捉える。

さらに通信施設の8時の方角から再び爆発が起き、敵兵士が慌ただしく応戦しているのがわかる。

“いくよ” “へい”

ぴよん総長とブリュンヒルデは雪景色を駆けた。

一気に標的施設に接近する。気づかれずに標的施設内に突入した。

標的施設の屋上へと駆け上がる。

敵兵はこちらに気づかず、背中を見せていた。陽動のゲロ軍曹の持つM249と思われる掃射に釘づけになって、AK74突撃銃をぶっ放しながら応戦している。

ぴよん総長は、自分のG36を単発にセットし、敵兵の後頭部に

照準を合わせ、引き金を引いた。

“一人、抹殺”

びよん総長が通信をいれると同時に、

“こつちも一人抹殺”

MSG-1狙撃銃を持って後方から遠距離狙撃している少茶から、通信が入る。

と、びよん総長の足から血しぶきが噴き出る。

びよん総長は倒れつつ、転がって物陰に入る。

びよん総長は、ブリュンヒルデを見た。

彼女にも、銃撃が容赦なく襲いかかっている。

雪の積もった屋上階に、雪煙りが舞い上がる。

だがブリュンヒルデは金髪を翻し、屋上を華麗に駆ける。

その不規則でしかし優雅なステップは、確実にばらまかれる弾を避けていた。

“すげー”

ぴょん総長は、足の手当をしながらいう。

ブリュンヒルデは雪の舞う屋上で、華麗に宙返りを放ち、HS2000ピストルを、屋上の片隅に向かって放った。

屋上の片隅では、そこに潜んでスタイヤ突撃銃を構えていた兵士が、眉間に穴をあけて倒れた。

ブリュンヒルデは、宙返りをはなった後、雪の上に優雅に着地する。

風が吹き、雪が舞い上がる。

そして彼女は空を見上げた。

銀色の雪が、彼女の顔に降り注ぐ。

彼女は、そのまま微動だにしなかった。

通信が入る。

“こちらの完敗です。さすが、伝説の死神チーム”

“最後の、戦乙女姐さんの動き、マト ックスでした”

“まじ、すげえ、おれ、脳死”

“ 今度、うちのチームとオフ会しません？ 関東在住でしたら ”

雪の町。

とあるマンションの一室。

ジャージ姿の青年が、キーボードを叩く。

“ 当方、埼玉で引きこもりっす。でもたまには外にでよっかな ”

青年の前のPC画面に、レスが入る。

“ お、いいっすね ”

“ 少茶です。千葉県民っす、OKです ”

“ ゲロ軍曹です。神奈川であります。ぜひ参加したいであります ”

青年はキーボードを叩く。

“ ブリュンヒルデ姐さんは？ ”

しかし、彼女（あるいは彼？）からは、返事がなかった。

ただ画面の中では、金髪の女が無表情に空を見上げていた。

そのCGの顔が、一瞬笑ったような気がして、青年は目をこする。

そして青年はキーボードを叩く。

“ま、また、今度、ネットの中で会いましょう”

“また、派手に殺戮やりましょうや”

“ぼくらは、繋がっていますから”

雨の降る町。

とある病院。

館内放送で“鳩野先生、鳩野先生、心外病棟にお越ください”とアナウンスが響き渡った。

その病院の一室。

8歳の少女、皆川柚璃亜の病室から、泣き叫ぶ母親が看護婦によつて病室から外に出される。

駆け付けた医師達が、救命処置のため、少女の小さな体に刺さつ

たルートにさらルートをつなげ、喉の管をつっこみ、機械の調整を行う。

心移植のドナーを待ち続けたその少女は、この数か月、外出していなかった。

彼女はほとんど身動きが取れず、病室のベッドの上で過ごしていた。

かろうじて動く腕と指でゲーム機のコントローラーを握りながら、ただ一言、“ほんとの雪合戦がしたい”と言った直後に急変したという。

救命処置を行う医師達の喚き声や、耳障りな電子音が鳴り響くその部屋の片隅。

その片隅にどかされたテレビモニターの中では、雪景色の中、金髪の女が無表情に空を見上げていた。

そして彼女は光に包まれた。

そして皆川柚璃亜は、自身に降り注ぐ光の中に、神々しい女の姿を見た。

青い鎧に、翼の髪飾りをした女だった。

皆川柚璃亜は、その女の包容を受け止めながら、その体を燃やした。

“私は、その魂にいました”

“神々が黄昏を迎えるまで、あなたに栄光の戦場をあたえましょう”

ブッシー(前書き)

E d i t h P i a f L · A C C O D E O N I S T E

h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ? v
V - 4 P M g X B J K o & a m p ; f e a t u r e = r e l a t
a n e
(ブッシー)

ブッシー

“ 太古の昔、ゆるぎない現在、遙かなる未来 ”

“ 慈愛の大地、崇高なる大空、母なる海原、そして無限の宇宙 ”

“ いつの時代であろうとも、いずこの世界であろうとも ”

“ 血が流れぬときはなく、魂が燃えない場所はない ”

“ 人は争い、殺し合う ”

“ これは私が見守ってきた、そんな戦士たちの記録 ”

“ そこには、ロマンも感動もない。ただ、生と死の冷淡な現実があるだけ…… ”

ブッシー

破壊つくされた石造りの町。

その一角で、女の歌が響いていた。

エディット・ピアフ、「アコーディオン弾き」である。

街一番の娼婦。

彼女は、アコーディオン弾きに恋をする。

彼を見つめるために、今日も場末のダンスホールに足を運ぶ。

決して踊ることなく、ただ、アコーディオン弾きを見つめる…

…。

破壊され尽くし、天井が抜けた建物の中で、アメリカ兵たちが数人、そのレコードの歌声に耳を傾けていた。

あるものは、その歌声をうっとりとした表情で聞き、あるものは不安げに周囲をきよろきよろとみている。

ただ、誰もフランス語の歌詞の内容はわからなかった。

ジョンソン軍曹はたばこをふかしながら、甘く、そして大人の気品にあふれる女の歌声に、ため息をついた。

「“奴”の部隊か？」

「でしょうね」

伍長が返す。

ジョンソン軍曹はたばこを投げ捨てると、トンプソンサブマシンガンをちらつと見ながらいった。

「野郎め……、ナチのくせに粹なことをしやがる……」

「どうします」

伍長はM1911A1ピストルの残弾数を確認しながら言う。

ジョンソンは言った。

「無視だ……。俺たちをおびき出す罠だよ……」

殺伐とした雰囲気の中、ジョンソンは、双眼鏡を取り出すと、周

困の警戒を行った。

この街に入って4日目。ドイツ軍の防衛部隊の指揮官は、狡猾な男だった。

神出鬼没のその男は、ゲリラ戦術が得意とみえ、行軍するジョンソンの部隊に何度も奇襲をかけた。

対するジョンソンもゲリラ戦にはゲリラ戦ということで、廃墟の街を静かに移動する。

この数日、ドイツ軍もアメリカ軍もお互いの位置を見失っていた。ただ、不気味なほど静かな廃墟の街で、重く張りつめた緊張だけが走る。

突如としてかかったレコードは、敵の罠だった。

レコードの音源に敵軍が接触したのは確かだろうが、それを確かめに行ったら最後、待ち伏せにやられるのは分かり切っている。

「ま、敵さんからのプレゼントと思って、ここはゆっくりと音楽鑑賞といきますかね」

伍長が煙草をくわえながら、M1911A1の分解点検を始めながらいった。

隊員は緊張を解き、煙草を吹かす。

ジョンソンも、サブマシンガンにセーフティをかけると、あくびをして、瓦礫の散らばる床に寝転がろうとした、

その時、ハツとしたジョンソンは起き上がり、サブマシンガンの安全装置を解除しながら構える。

伍長以下、隊員全員に緊張が走り、M1小銃とBARが構えられる。

と、

「じゃあ」

との鳴き声とともに、白い仔猫がストーンと床に着地した。

「……」

ジョンソンはかぶりをふるってサブマシンガンをおろした。隊員たちも、ため息をついて銃をおろす。

仔猫は、しっぽをうねうねと振りながら、口をあけて、ふたたび、「じゃあ」と鳴いた。

ジョンソンは真横に腕をのばした。

傍らの伍長の口元にくわえられているたばこに腕を伸ばすと、それを奪い、

「しっ」

といった猫に投げつけた。

仔猫は一瞬、飛び退く。だが、投げられたたばこに興味をひかれて近づく。だが鼻先で、それが食べ物ではないと悟ると、恨めしそうにジョンソンを見る。

「……」

ジョンソンはヘルメットを指でコンコンと叩きながら、無視するように目をそむけ、その場に座った。

緊張をといった他の隊員も、その廃墟の床に腰を下ろす。

ジョンソンは目を閉じた。と、

「軍曹……」

伍長が言う。ジョンソンが、

「たばこは、つけといてくれ」

と言いつ返した時。

「いえ……」

との伍長の声と同時に、

「にゃあ」

との声が響いた。

「……」

ジョンソンが目をあけると、小さな白い仔猫が、トトトとジョンソンに足元へと寄って来ていた。

「……」

ジョンソンは微動だにせず、目だけで白い仔猫を見た。

青い目の仔猫だった。その青い眼を見つめるジョンソン。

仔猫は、まっすぐにジョンソンの茶色の瞳を見つめ、

「にゃあ」

と鳴いた。

ジョンソンはため息をつき、傍らにおいた自身の荷物に手を伸ばす。

そして、レーションを取り出した。

「プッシーキャットめ……」

忌々しそうに言うジョンソン。

その間、白の仔猫は、行儀よくそこに座っていた。

ただ、しっぽだけを、エディット・ピアフの歌声に合わせる様に、うねうねと動かしていた。

7日目。

敵の部隊は一向に姿を見せなかった。ジョンソンの部隊は移動した。

彼らはカフェの廃墟に身を潜めた。

「軍曹！ みてください」

カフェが完全に無人かどうか確かめるため、奥に入った兵が、オクラホマ訛りで言いながら戻ってきた。

彼は袋を持っていた。

「なんだ？」

というジョンソンに、そのオクラホマ訛りは抱えていた袋を開けて言った。

香しい芳香が漂う。

オクラホマ訛りは、悪戯っぽく言った。

「コーヒーです。上物ですよ……」

「……」

ジョンソンが首を振ったその時、カウンターにトラップが仕掛けられていないか調べていたテキサス出身の兵が言った。

「軍曹……」

彼はニヤニヤとしながら、指をさす。

ジョンソンがその指をさす方をみると、金色に磨き上げられたコーヒーメーカーがそこにあった。

ジョンソンはため息をついた。

水道が生きていたため、水には困らなかった。

兵士たちは、カフェの奥に身をひそめながら、文明の香りに酔い

しれる。

ジョンソンは、カフェの裏手、塀に囲まれた空間で、ヘルメットを枕に休んでいた。

と、

「にゃあ」

との声がする。

ジョンソンは目を開ける。

砲弾で空いた壁の隙間から、白い仔猫が入ってきた。

「また、お前か……」

微動だにせずジョンソンが言う。

白い仔猫は、

「にゃあ」

と返した。

そして、仔猫はトトとジョンソンによってきて、ジョンソンのブーツに背中を擦りつける。

「つたく……、おねだり上手め……」

ジョンソンは、腕だけを伸ばし、リュックをあさくる。レーションを取り出そうとして、一枚の写真がリュックからこぼれおちた。

ジョンソンは、その写真を見る。

ジョンソンに肩を抱かれた女性と、女性の手を握る小さな女の子の写真だった。

白黒の写真の、その女の子の目を見る。そして、足もとの仔猫を見る。

「にゃあ」と鳴く白い仔猫の青い目を見つめる。

ジョンソンは、写真をリュックに投げ入れると、レーションを取り出した。

「ほれ、メアリー」

ジョンソンはレーションを開けながら言った。

「軍曹、敵の位置ですが……」
しばらくして、伍長がカフェの裏手に顔をだした。そして、言葉の途中でつぐんだ。

軍曹は眠っていた。

その胸の上に組まれた腕には、サブマシンガンではなく、目をつぶって丸まっている白い仔猫が抱かれていた。

9日目。

ジョンソンは、路地を静かに、警戒しながら前進していた。路地のあちこちには、脇の建物から壁が崩れおちている。

前方はもちろん、その建物にもゆっくりと気を配る。隊員たちもジョンソンに続く。

割られたガラスのショーウィンドウと、その中のボロボロに焼け落ちたマネキン。

その前を通るアメリカ兵。

略奪を受けたのか、缶づめとキャンディが散乱する雑貨屋。

その前を通るアメリカ兵。

鍋がひっくり返し、慌てて逃げたその時のまま、時間が経過した様子が裏口から覗ける家屋。

その前を通るアメリカ兵。

破壊された日常の光景を、彼らは、全神経をびんびんに張りつめさせながら、汗を垂らして前進した。

その時、ジョンソンは足を止めた。

彼らが進んできた路地が大通りに交差する手前だった。

後続のアメリカ兵も足を止め、一斉にM1小銃とBARを構える。ジョンソンはごくりと唾をのむ。サブマシンガンの安全装置は外されている。

それを構えながら、わずかに感じた気配の様子をうかがう。

その時、トトと白い仔猫が、目の前の大通りに姿を現し、ジョンソンたちの前を横切った。

その途中で、白い仔猫はジョンソンに気が付き、足をとめて「にやあ」と鳴いた。

ジョンソンは、

「……やれやれ」

と、ため息をついた。

「おいで、メアリー」

と言ったその時、

「エヴァー！」

との声を聞き、同時に姿を現した灰色の服の男と目を合わせた。

ドイツ陸軍ルドルフ・フォン・ミッターマイヤー少尉は、ゲリラ戦のプロだった。

彼が率いるドイツ軍部隊は、廃墟に潜み、辛抱強く敵が網にかかるのを待った。

が、敵のアメリカ兵もまた、静かで忍耐強く、なかなか尻尾を出さない。

その日、ミッターマイヤー少尉は、部隊を南西に移動させていた。大通りを静かに移動していた。

すると目の前に、白い仔猫が現れた。

その仔猫は、ここ数日おきにあらわれ、餌をねだる仔猫だった。緊張の連続の中、彼らはその仔猫に癒されていたのだった。

とくにミッタマイヤーは、その仔猫の青い眼を、故郷の恋人の目に重ねあわせ、その仔猫をかわいがった。

恋人にちなみ、エヴァとの名前までつけた。

神経を張り詰めながら移動する彼らの前に突如現れた仔猫に、ミッタマイヤー少尉は、一瞬、緊張の糸を切らして、「にゃあ」となく仔猫に近づいた。

そして、アメリカ兵と鉢合わせとなった。

硝煙が晴れる。

新たに瓦礫が散らばる大通りと路地の交差点。

どこからか、エディット・ピアフの歌う「アコーディオン弾き」が聞こえてくる。

やがて戦争がはじまり、ダンスホールのアコーディオン弾きは兵隊にとられてしまう。

彼が戻ってきたら、二人で店をもとう……。

そんな夢を持ちつつ、娼婦はダンスホールへ足を運ぶ。

踊ることはなく、ただ、彼を待ち続けるために。

だが、彼は帰ってこない。

年月が過ぎ、彼女の夢は散り去った。

年老いた娼婦は、今日もダンスホールへ足を運ぶ。

別のアコーディオン弾きが、曲を奏でている。

彼女は全てを忘れようと踊り始める。

だが、涙が涙がとまらない。

彼女は踊り続ける。

音楽を止めて！と心の中で叫びながら……

ジョンソン軍曹は、目を開けた。

彼はうつぶせに倒れていた。

起きあがるうとしたが、起き上がれなかった。

自分の周りに血が広がっているのを認める。

その血の先に、灰色の軍服の男が、同じように倒れているのを認めた。

白い仔猫は、二人の間で、どっちに餌をねだろうか迷っている様子だった。

「にゃあ」となく仔猫を見つめながら、ジョンソンは笑った。

ふと見ると、ドイツ兵もまた笑っているのに、ジョンソンは気づいた。

その仔猫の前に、松笠状の物体が転がり、そして爆発した。

そしてジョンソンとミッタマイヤーは、自身に降り注ぐ光の中に、神々しい女の姿を見た。

青い鎧に、翼の髪飾りをした女だった。

ジョンソンとミッタマイヤーは、その女の包容を受け止めながら、その体を燃やした。

“私は、その魂にいました”

“神々が黄昏を迎えるまで、あなたに栄光の戦場をあたえましょう”

プッシー(後書き)

撤回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1674g/>

戦乙女の鎮魂歌

2010年10月9日19時33分発行